

# 守り守られた神宮との絆

うえなか まゆめ  
植中 真結  
(しがく総合研究所)

皆さんはお伊勢参りをしたことはあるだろうか。伊勢神宮（正式名所は「神宮」）は、内宮（皇大神宮）と、外宮（豊受大神宮）の両正宮をはじめ、十四ある別宮、四十三の摂社、二十四の末社、四十二の所管社の計百二十五の神社の集合体を指す。「一生に一度は行ってみたい」がキャッチフレーズになっており、平成二十五年（二〇一三年）に執り行われた式年遷宮では、内宮・外宮合わせて千四百二十万四千八百十六名もの国民が参拝した。このように国民が集まる所以は何か。神宮に込められた天皇の想いと神宮を支え続けた国民の歴史を見ていく。

## 一・歴代の天皇の想いが受け継がれる神宮

内宮の御祭神である天照大神は皇室の祖先神であり、元々宮中にてお祀りされていた。第十代崇神天皇の代に日本では疫病が流行し、多くの国民が亡くなったり、流民が増え食糧が不足したりと国難にあう。この国難を乗り越えるために更に良い土地で天照大神をお祀りしようと考えたことが、現在の伊勢の地への鎮座に繋がっている。鎮座にあたっては、伊勢の地が天照大神にお供えする御料（器物や供物など）や神饌（神様にお供えする食

事）が生産できるかどうかも調査された。日本書記によると、第十一代垂仁天皇二十六年（紀元前四年）九月十七日に内宮が鎮座。以来、神宮では天皇に代わって国の安泰と五穀豊穡、国家の繁栄、国民の幸せが祈り続けられている。

内宮鎮座からおよそ五百年後、第二十一代雄略天皇の即位二十二年（四七八年）に天照大神の御饌都神である豊受大神（お食事を司る神）をお祀りする外宮が鎮座。以降、日毎朝夕大御饌祭という天照大神に神饌をお祀りする祭祀が毎日朝夕行なわれ、千五百年間欠かすことなく今日に至っている。その際には禰宜が祝詞を奏上し、天皇に代わって皇室の安泰・国民の幸福を祈られている。また、天武天皇の御発意により始まった式年遷宮（二十年に一度社殿と神宝を新調して天照大神に新しい社殿へお遷り願う神宮最大の神事）でも、国家と国民の平安をお祈りされている。

室町時代に一時中断された時期もあったが、「神々には常に美しく瑞々しい御殿にお鎮まり頂きたい」という古代の人々の想いが受け継がれ再開。千三百年にわたり継続され、平成二十五年（二〇一三年）で六十二回を数えた。明治時代では、明治天皇が初めて神宮へ足を運び、御製もお詠みになられている。「とこしへに民やすかれと祈るなる わがよを守れ伊勢の大神」これは、「どうか我が世を守りたまへ。天照大神よ。」と、永遠に国民が安らかに暮らせるように祈られた御製である。このように、天皇の国民を想うお気持ちなが長い歴史の中で受け継がれ現在の神宮が存在している。

## 二・国民の支えによって成り立つ祭祀

国民の幸せを願って行われる「日毎朝夕大御饌祭」や「式年遷宮」等の祭祀は国民の支

えによって成り立ってきた。

まず、日毎朝夕大御饌祭では、現在、御飯三盛・塩・水・鱈節・魚・海藻・季節の野菜と果物・御酒三献に箸を添えて毎度お祀りされている。神宮新田では十数種類の御料米、神宮御園では五十数種類の野菜や果物が育てられ、祀られる野菜や果物・魚などは、盛り付けられる土器の大きさにぴったり合ったものと定められている。これら神饌は、すべて伊勢の地で国民によって自給自足で賄われている。平安時代の『儀式帳』によると「水・飯・塩」を主にし、調達出来た日やハレの日には魚介類や野菜などをお供えしていた。ここで使われる水は、外宮神域内にある上御井神社の井戸水（神話で語られている高天原にある天の忍穂井の水が移されたと伝わっている）を毎日汲み上げたものである。調理火は、舞鑽式という古来の発火方法で熾される。調理は一時間半。一回のお祭りにかかる時間は

四十分。それが朝夕二回行われるため、毎日四時間以上かけていることになる。また、塩の製造では、五十鈴川の河口近く二見浦（内宮鎮座時に倭姫命がお定めになったと言われている）という特定の場所かつ七月土用の頃の炎天下にある濃度の高い海水を汲みあげ作られている。このような工程が現在も変わることなく執り行われている。

次に、式年遷宮では、遷宮の八年前に天皇の御治定によって準備が開始される。神殿造営に使用される萱は二万三千束（約五八〇トン／一束二五キロ）、檜は約一万三千本（直径六〇センチメートル以上の樹齢二百年以上。特に、正殿の柱は樹齢三百年以上が基準）である。つまり、三百年前の国民が三百年後の私たちのことを想って遷宮資材の準備をしてくれていたのである。そして、現在でも毎年四月に神宮宮域林に檜の苗木が約五百本植えられている。また、神殿に収める絹や麻、か

らむしなどで作られた御装束は五百二十五種千八十五点。金や銅や宝石類を精巧に細工した装飾武具や馬具や楽器、硯などの文具、脇息などの調度品を含めた神宝は合計百八十九種四百九十一一点。合計七百十四種千五百七十六点が新調される。第六十二回式年遷宮経費はおよそ五百七十億円。内、半分以上は国民からの寄付金で賄われた。

このように、神宮祭祀には、自給自足という並大抵ではできない努力かつ膨大な資材や資金を必要とする。この現状に対して、長い歴史の中では社殿をコンクリート固めにして数百年もつようにするといった案や、祭祀を簡略化するといったことも囁かれてきた。しかし、忘れてはならないのは、神宮鎮座時から今日まで引き継がれてきた天皇の想いである。国民が苦しい時、「どうか国民をお守りください」と私たちの幸せを願われた天皇のお気持ち現在の神宮の形ではないだろうか。

国民を大御宝と想い、常に心を寄せてくださっている天皇陛下。そのような国家元首を戴いていることへの感謝があったからこそ、先人たちは、この神宮の形を守り続けたのではないだろうか。その結果、日本の美しい伝統技術が神宮祭祀を通して現在に受け継がれている。そして、二十年後、数百年後の日本のためにと日本の未来を考えて行動する国民性も養われてきた。二十年経った社殿で使用した資材はリサイクルされることから、物を大切にする心も育まれてきた。天皇が国民のために願われ始まった神宮の祀りの形は、まさに国家の繁栄に繋がっているのではないか。「一生に一度は行ってみたい」そう言われる所以は、長い歴史の中で紡いできた天皇の想いと国民の想いが共鳴しあって神宮が存在しているからだと感じる。歴代の天皇と先人たちが築き上げてきた絆を後世へ受け継いでいきたい。